

自らの進路を 明らかにしよう

—新入生諸君へ—



学長 宮本 憲一

教育の目的は、自立する人間を作ることにあります。高等教育はその最後の機会で、入学生諸君達はこの四年間で、自立して社会生活を送れる能力と人格をつけて頂きたいと思っています。最近、大学の卒業生の二〇%が、フリーターといって、就職も進学もしないで、学生時代と同じように、アルバイトをして生活をしていると言われていました。

人には職業選択の自由がありません。最近のように、失業率が五%を超え、新規卒業者の就職が長期に渡って困難になっている時代には、就職先を決めていても、なかなか合格せずに、フリーターも止むを得ないかも知れません。また、小説家志望のように自立して執筆を業としたり、芸能で身を立てようとしている人は、直ぐに世の中に認められる場合は少ないので、修業期間中にフリーターとして生活しなければなりません。しかし、今、フリーターが増えているのは、このように志があるが、仕事がないという理由だけで説明はできません。

恐らく、大学卒業者が人生の目的を見出せず、また、現代社会生活をする能力に自信がないために、フリーターにならざるを得ないという人が増えているのではないで

しょうか。最初に書きましたように、大学は学生が自由な意志で、社会的に自立できる能力、そして、人々と連帯して生きていける人格をつける機関です。

高校時代と違うところは、それぞれの専門分野の枠はありますが、カリキュラムは自由に選択できます。ゼミナールなどの少数教育では、先生の個人的な指導がありますが、高校時代のクラス担任とは違って、自由に先生を選ぶことができます。良い先生を選べば、勉学に意欲がでるだけでなく、一生の交際ができるでしょう。この自由ということこそ、大学生活の醍醐味です。一生のうちでこれ程時間の自由がある時代はないでしょう。

しかし、自由には落とし穴があります。伸びていく自由もある代わりに、落ちていく自由もあるのです。失敗は高校時代と違って、クラス担任の責任ではなく、学生自らの責任なのです。大学の自由な生活の中で、考えてほしいことは、自立して社会で何をするかという進路を明らかにすることです。その進路に沿って、研究や勉学を進めることです。もちろん、今の国際化時代の高度な知的社会で活動するには、どのような進路を選ぶかに関わらず、最低限、身につ

けておきたい教養や基礎学力（語学や情報処理）が必要でしょう。

高度成長が続いていた時代には、進路が不明確でも、大企業を始め、どこかに就職はできたので、在学中に専門的な研究や学習をそれ程しないでも良かったようです。しかし、バブル崩壊以後、名だたる大企業が潰れ、漠然とした目的でサラリーマンになる時代ではなくなりました。中小企業で未来を担う特殊な専門分野を持つ分野に就職を希望する学生が増えてきました。大学院へ進む学生も増えていきます。海外の大学や大学院の進学、或は国際企業への就職も毎年多くなっています。かつてよりも進路の選択の範囲は、大きく広がっています。諸君達は漫然と大企業へ就職するといふのではなく、自らの能力と情熱を捧げ得る仕事は何か、大学の四年間に十分に考え、自らを試して下さい。

